

シーブーラパー『人生の戦い』について

—その人間認識についての一考察—

宇 戸 清 治

1

1976年10月、シーブーラパー (Sibūraphā, 本名 Kulāp Sāipradit) が北京で69歳の生涯を客死という形で閉じた時、故国タイはその3年前に成功した学生反乱の余波がまだ続き、弱体化した文民政権をはさんで労働組合、農民界、学生からなる進歩派の勢力と、政変以前の政治権力を奪回しようとする旧支配勢力がしのぎを削っている最中であった。まもなく、同年10月の「血の水曜日事件」と呼ばれるクーデターによって旧勢力は再び権力の座についたが、長期の軍部独裁の下で奪われていた表現の自由の獲得や社会改革への動きはそれによっても止むことはなかった。軍部独裁の時代に、共産主義=非国民のレッテルを貼られて、その思想に言及することはおろか、名前を口にすることさえはばかれ、いわばタイの歴史から抹殺されていた幾人かの先進的士族の思想や生涯の発掘と紹介もこの時、精力的に行われた。スワット・ウォーラディロック氏 (Suwat Wōradilok) によって、タイ文学の「巨匠」(ācān yai) と形容された¹⁾ シーブーラパーの文学作品や政治・社会評論、外国の思想—特に史的唯物論の翻訳紹介、それに仏教に関する著述など多岐にわたるその業績の紹介もこの時に行われたのである。

今日、タイ近現代文学の歴史やその内容を語る時、シーブーラパーのこれらの業績を避けて通ることは全く不可能である。我が国においても、ここ10年来、東南アジア諸国の文学の紹介がようやく定着してくる中で、シーブーラパーの作品もその代表作といわれる長編小説が2点邦訳された。²⁾ しかしながら、文学者あるいは思想家、また時によっては社会運動家としてのシーブーラパーの思想の中身については、上記翻訳の解説という形でしか紹介されておらず、未だ十分な解明が試みられているとはいえない。

シーブーラパーの思想には、全生涯を通じて、西洋思潮に影響を受けたと思われるヒューマニズム思想のほかに、後期の社会運動に見られる社会主義的な思想もあり、さらに、仏法への並々ならぬ関心が示す独自タイ的な「民道」思想³⁾ が絡まって複雑な様相を呈しており、その研究は必然的に、単に一タイ文学者の思想という限定された領域の研究にとどまらず、近代タイ知識人の思想と実践の解明という更に大きな課題をも抱え込むものとなる。

さて、タイ国におけるシーブーラパー研究は1978年に出版された月刊誌『本の世界』(Lōk

Naṅsūē) 11月号と1982年の同誌7月号の「シーブーラパー特集」⁴⁾以降、飛躍的に進み、今日では全集に近い形でその著作の出版がはかられているが⁵⁾ タイ批評界におけるシーブーラパーの研究と評価は、これまで、どちらかというとな彼の中期・後期の作品と思想に集中し、その中でも特に社会変革者として彼の果たした役割に重点が置かれているくらいがあるように思う。最近『タマサート・ジャーナル』(Wārasān Thammasāt) に発表されたウィワット・カティタンマニット氏 (Wiwat Khatithammanit) の論文「平和反乱事件」(Kabot Santiphāp) もそのひとつといえよう。⁶⁾ しかし、本稿では、シーブーラパーの初期作品にあたる『人生の戦い』(Soṅkhrām Chīwit) をめぐって、そこに現れた彼の人間認識と、小説へのその応用の形を見ていくつもりである。というのは、この『人生の戦い』に示された主人公のモチーフの中にこそ、シーブーラパーが自己の社会的役割をどのように認識していたかがよく現れており、その姿勢は、様々な思想的転換を経たと思われるその後の時代に書かれた作品にも一貫して示されるなど、そこに彼独特の文学観、人間観が露呈していると考えられるからである。

2

シーブーラパーの中編小説『人生の戦い』が出版されたのは、タイ絶対王制を終えんさせた立憲革命が今まさに始まろうとする1932年、著者が27歳の時であった。この作品は、実力派の新進作家として将来を嘱望されてはいても、現実的にはまだ名の知られることのなかったシーブーラパーの名を一気に高からしめた。彼はその3年前の1929年に、新しい時代の新しい文学の在り方を求めて創刊された隔週雑誌『スパープ・ブルット』(Suphāp Burut, 紳士の意)⁷⁾の事実上の主宰者として、小説の社会的評価を高めるために活動しており、『人生の戦い』はまさしく、『スパープ・ブルット』誌上において彼が主張した路線の上に生れたものであった。

この『スパープ・ブルット』運動にシーブーラパーを駆立てたものは、20世紀初頭以降の出版文化の急速な発展、新聞雑誌の相次ぐ発刊にもかかわらず、依然として小説が「一部有閑階級がすさびに読む空虚な話」としてしかとらえられていなかった事態を直視し、作家を志向する者が自ら同盟を結んで、小説を社会的意義を持つ精神的活動として世間に認知させていくと同時に、未だ職業として成立していなかった作家業を西洋並みにひとつの職業として成り立たせていこうとする強い願望にその根底があった。『スパープ・ブルット』創刊号でシーブーラパーは次のように述べている。

「季刊月刊を問わず、(現在の)新聞・雑誌は(作者から)作品を買い上げてそれを掲載するという方法を取り入れてはいないようだ。今回、我々が初めてそれをやろうというのは、そうすることが適当な時期に来たからと判断したからである。(中略)今日の我が国の文学作品というものは、その9割までが趣味 (len) で出されておられ、仕事 (nān) という意識を持って

書かれたものは1割程度にすぎないと思われる。今こそ我々は、文学作品をめぐるこうした局面を変化させ、趣味から仕事へと（認識を）変える時期が到来したのだと信じる。現在のところ、そう高い値段で作品を買取することは出来ず、受け取った金額は（必ずしも）作者の誇りに見合うものではないかもしれないが、それでも、作者に対しては、自分の時間を使って書いたものがある程度の収入になったと感じさせたり、少なくとも、（自分は）作家という職業人として作品を書いたのだということを感じさせることはできよう」（「我々はなぜ作品を買上げるか」）⁸⁾

この『スパーブ・ブルット』の理念を現実化するためには、とりもなおさずシーブーラパー自身が作家業によって身を立てていくことが必要であり、そのために作家としての名声を確立するという課題をつきつけられていたことを意味していた。『人生の戦い』を書くまでのシーブーラパーは、18歳の時に書いたといわれる『情熱の愛』（Khom Sawat Bāt Cit）を一応除くとして、1928年に書いた『じゃじゃ馬ならし』（Prāp Phayot）から、1930年の『女官の毒』（Phit Nān Kamnan）まではほぼ3年間の間に全部で9作を残している。この内、比較的著名な作品『男児』（Lūk Phūchai）は、新興勢力たる華僑系タイ青年の立身出世物語を扱う中で、タイの旧上流階層の没落を描くなど、彼らしい歴史意識が見られるものの、全体的にはタイの文芸批評家によって「ロマン主義」文学と呼ばれているセンチメンタリズムの傾向の濃厚な通俗小説が多かった。これは、未だ芸術としての社会的認知を得ておらず、文学そのものの基盤が確立していなかった時代にあって、読者の好みに合せざるを得なかった当時のタイ文学界の状況も手伝っていることは疑いを入れない。『人生の戦い』は、シーブーラパーにとっては、上記の路線の最後にあたる作品といえる。

シーブーラパーのもうひとつの代表作といわれる『絵の裏』（Khanlaj Phāp）を翻訳された小野沢氏は、その解説の中で、『男児』に見られた努力による上昇というオプティミズムに対し、『人生の戦い』ではどんなに努力しても貧困から抜けせない社会体制のもつ矛盾が告発されているとして、『男児』から『人生の戦い』の間に、大きな思想的転換をみとめることができるとされる。⁹⁾ 確かに、3年の隔たりをもって書かれたこの二つの作品の筋書きのみを追うならば、その指摘に反論の余地はなく、まず妥当な意見であろうと思われる。しかしながら、実際には、気鋭の文芸評論家サティエン・チャンティマトーン氏（Sathien Canthimathōn）も指摘するように、¹⁰⁾ 『人生の戦い』以後の幾つかの作品には、なお依然として「ロマン主義」の傾向を色濃く認めることができ、シーブーラパーの思想が『人生の戦い』をもって一気に転換されたと言切るには、なお検討すべき問題が残されているように思う。

ちなみに、『人生の戦い』までのシーブーラパーの作家活動およびその思想を、当時のタイ

著述家に一般的な傾向として認められる「ロマン主義」基調の作風をもった初期時代とすれば、1939年『スパーブ・ブルット』の発刊と、後述する高僧プッタタート師との出会いから、オーストリア留学によって外からタイ社会を客観的にみつめる時間を持ち、タイ社会変革の可能性を観念的に追及した時期（『絵の裏』、『また会う日まで』（Conkwā Rao ca Phop Kan Īk）が主要作品）を中期、そして、社会主義思想の一定の影響を受けて、「平和反乱事件」や検閲への反対運動¹¹⁾などに見られる積極的な実践活動を続けつつも、仏法に依拠したタイ的な理想社会の建設の方向も模索していたのではないかと思われる後期時代の3期に分けることができるだろう。

3

『人生の戦い』のストーリーの概要は次のとおりである。

主人公ラピンは、幼少の頃相次いで両親をなくして以来、親戚からも冷遇され、物欲で動く人間の醜さを知った体験をもつが、そうした不幸に押しつぶされることなく、バンコクで下級官吏をしている25歳の青年である。彼が文通し始めた相手は20歳になったばかりのプルーンという女性で、叔母の家で家事手伝いをしているものの、以前は、高級官僚の一人娘として立派な教育を受け、何不自由なく育った人物である。しかし、彼女もまた、公金横領という無実の罪を着せられて中国へ逃亡せざるをえなかった父親に捨てられ、婚約も破棄されたという不幸な過去を背負っている。

ラピンは手紙の中で、将来は有名作家として身を立てるのだという抱負を語り、ドストエフスキーの生き方、考え方に共鳴していることを述べる。プルーンもまたその夢の実現を信じ、ラピンによって書物をひもとく喜びも知らされる。二人の仲は次第に親密さを増し、人間不信の点でラピンより深いものがあつたプルーンの心も、ラピンの無私に近い愛によって開かれていく。同時に、貧しい人々や社会的弱者に対する同情と共感、富裕階層の生活態度や利己的行為に対する疑問が共有されていく。

ラピンは乏しい収入をさいて、何くれとなくプルーンを助けるが、なぜかプルーンは結婚の約束だけは避け続ける。過去の不幸な事件が、彼女を愛と結婚とを完全に別のものと考えさせる女性にしてしまったのである。

そんなある日、彼女の生活に一大転機が訪れる。映画俳優の一般公募に応募して採用されたのである。ラピンの不安をよそに、やがて彼女は、若くかつ美貌でその上資産家の映画監督に求婚され、ラピンとの愛にほとんどちゅうちょすることなくその申出を受け入れる。突然の恋敵の出現に強烈なジェラシーを隠そうとしないラピンに対し、プルーンは初めて、過去の事件が彼女の心に与えた呪わしい傷＝愛にたいする不信、を長文の書簡によって明らかにする。財

もあり知もある彼との結婚は、愛とは無縁のものかもしれないが、失われた美しい過去にもう一度帰ることができる。それは父の恨みをはらすことにもなる。そうすることによって、自分は「ようやく、自分のたてた誓いの呪縛から逃れることができるのだ」と。かくて、プルーンをうしなったラピンは、ひとり絶望のうちに取り残されてしまう。

上に概説した『人生の戦い』が、出版当時どのような世評をもって迎えられたかは、資料不足で明言することができないが、現代タイの文芸批評家たちのほとんど絶賛に近い評価から判断して、当時であっても相当の評価を得たことは間違いないものと思われる。そのひとつの証拠として、既述の『スパーブ・ブルット』誌の人気をあげることができる。シーブーラパーによって始められたこの雑誌は、当初の予想を越えて2500部も売れ、第2号は4000部が印刷されたという。¹²⁾ 1932年当時の人口約1200万人のうち、識字率は5.7%に過ぎなかったこと、さらに今日のタイにおいてすら、文学作品の初版本の印刷数は多くて5000冊程度であることを考えるならば、これは驚異的な数字というほかはない。『スパーブ・ブルット』の売れ行きが、シーブーラパーの知名度に関係していたであろうことは大いに考えられることである。

古典にも近現代タイ文学にも通じた文芸史家として知られるチュー・サタウェーティン氏 (Cūē Satawēthin) は、「弱者や貧乏人に対して慈悲と同情とを持つよう訴えかけたタイ最初の人道主義的小説であり、(中略) この小説に匹敵する、同様の傾向の作品は今に至るまで現れてはいない」と述べたうえ、『人生の戦い』の成功の理由をとりわけその美しい文体に求めている。¹³⁾ チュー氏はその著書『タイ文学史』の中で、シーブーラパーの作品についてはただ『人生の戦い』のみを扱っているだけで、この点から見ても、上の賛辞が最大級のものであることが分る。さらに、1949年に『文芸誌』(Aksōnsān) というタイトルの雑誌を創刊し、『資本論』をタイで紹介したこともあるスパー・シリマーノン氏 (Suphā Sirimānon) は、『人生の戦い』の性格を、「読書人をして社会的公正とは何かという問いを発せざるを得なくさせる小説であった」としている。¹⁴⁾

これに対し、唯物史観の立場から精力的に現代タイ文学の評論を行って、『タイの「生きるための文学」の系譜』の著書もあるサティアン・チャンティマトーン氏 (Sathien Canthimathōn) は、上記の二人の見方を指摘しつつも、当時のシーブーラパーの階級的立場をあくまでプチブル知識人と規定し、その物の見方の限界を指摘する。シーブーラパーがすでに資本主義経済のもたらす害毒に気付いていたとして、次のように述べている。「たとえ、資本主義経済と共に入ってきた自由主義思想が、サクディナー思想の後進性にまさっていたとしても、慈悲心というヒューマニズム思想で武装し、同時代人に一步先んじていたシーブーラパーは、資本主義の欠点は、全ての物を利潤を得るための商品にしてしまうという点にあるということを見

逃すことはなかった」と、と。¹⁵⁾

サティエン氏のこの指摘は、本文の第18章でシーブーラパーの分身として登場する作家ドゥシットの口を借りて語らせた部分に言及したものである。確かにドゥシットは、「金」が世界の新しい支配者になったとは言っているものの、前後の文脈においてその意味をとらえる時、必ずしもサティエン氏の言うような資本主義対サクディナー思想という二項対立の図式が明確に意識されていたとは断言できない。ドゥシットが語っていることは、今や中産階級にまで行き渡った金銭ずくの恋愛や結婚観に対する失望であって、しかもその失望は、真の愛とは何かと問うラピンの質問に対する形で答えられたものなのである。これを、ただちに資本主義の価値観と結びつけるのは、やや拙速すぎるように思う。シーブーラパーがこの問題をはっきりと自覚するようになったのは、早くとも、1932年の立憲革命以後のことであろう。従って上記の指摘は、例えば、中期時代の1937年の小説『絵の裏』における現代青年ノッポンのように、彼を資本主義の落し子として批判的に描きながら、他方で、旧支配階層の没落をおし進める役割を仮託させた展開の場合に、初めて妥当性を持つのではなかろうか。更に言えば、オーストリア留学直後の1950年に書かれた『また会う日まで』の中心テーマも、タイにおける資本主義の弊害といったことではなく、旧態依然たるタイ社会の後進性が語られると見るべきであろう。

『人生の戦い』で、ドゥシットの口を借りてシーブーラパーが言いたかったことの重心は、むしろ、資本主義の導入によっても変わらぬ強固な階層意識や社会秩序が、人間平等の考え方に立つヒューマニズム思想の普及を阻害しており、そのため、いつになっても弱者が救われないという点にあったのではなかろうか。つまりこの時点のシーブーラパーは、資本主義がタイ社会にもたらす影響に関心を寄せているというよりは、まだしも、現にある不公平の道徳的手段による解消により多くの関心を寄せているように見えるのである。しかしながら、サティエン氏もまた、先の引用の中で「慈悲心」という言葉を用いて、ヒューマニズムを求めるシーブーラパーの心情の背景に、仏教的な倫理観のあることを感じとっているのは興味深い。

4

『人生の戦い』に関する評論、紹介はこのほかにも多くあり、特に、『タイ社会と文学』(Nawaniyāi kap Saṅkhom Thai) を著したトリーシン・ブンカチョーン氏 (Trísín Bunkhacón) や¹⁶⁾、おそらくシーブーラパー研究の第一人者と目されるルンウィット・スワンナアピション氏 (Runwit Suwannaaphichon)¹⁷⁾等の研究は多くの示唆を与えてくれる。ここで、これら評者達の『人生の戦い』に関する論点を簡単に整理すれば、それは次のほぼ5つになる。①タイ最初のヒューマニズム小説である。②機会の不公平、不平等をうたっている。③上流階層を批判している。④ストーリーや用語法に外国文学の影響がある。⑤文体が抜きん出て美麗である。

これらの批評家たちによる評価は、それ自体としては『人生の戦い』のおおよその性格を描き出していると思われる。しかしながら、これらの評価には共通して重大な難点が存在するように思う。それは、この小説に盛られたシーブーラパー＝作者の、社会的弱者への慈愛に溢れた態度に見られる人道的思想の評価そのものに執着するあまり、作品自体をして語らせるという文芸批評の基本的な態度がやや稀薄だという点である。この作品が、実は、ドストエフスキーの『貧しき人々』のタイの翻案であり、そのため、作者による相当注意深い改変にもかかわらず、往々にして、当時のタイ社会の現実から遊離した場面設定やリアリズムを感じさせてい会話などが散見されることなどは、どの評者もあまり重要視していない。まして、この作品のひとつの性格として、明らかに通俗的センチメンタリズムがあることを指摘する評者はいない。しかし、プルーンが人を愛すのを止めたのは、自分を裏切った人物への復讐であり、今その復讐劇に幕が引かれる時が来たなどというエピローグはどう見ても典型的な通俗小説の筋書きである。さらに、チュー氏の言う華麗な文体というの、視点を変えれば、歯の浮くような、おおよそ、真実の正確な描写には縁のない形容詞の羅列と言えないこともないのである。2節において、作者がこの時、作者は必ずしも「ロマン主義」から脱していたとは言えないのではないかと指摘したのも、実にこの点にある。

しかしながら、もうひとつの別の面から見れば、『人生の戦い』は、単なる通俗小説に終わらない面がある。つまり、ロシア・フォルマリズムの旗手シクロフスキーが『貧しき人々』をさして、「この小説は書物的だ」¹⁸⁾と言ったというそれと同じ意味において「書物的」なのである。否、第18章に、作者に擬したドゥシットなる人物を登場させ、物語の進展とは全く別個に、仏教教説を交えた人生観を延々と語らせたり、ドストエフスキーの前半生と思想をとくとくと書き綴った部分(21章)を見るかぎり、『貧しき人々』よりはるかに「書物的」とさえ言えるであろう。つまり、シーブーラパーは『貧しき人々』を翻案するにあたって、単にその形式のみを借用したのであり、『人生の戦い』には明らかに、別の要素＝並の恋愛小説以外のモチーフが持ち込まれていると考えられる。

5

では、『人生の戦い』はいったいどのようなモチーフをもった文学作品なのか。この疑問を解くには、この小説の主人公に付託された作者の人間認識に注目して見る必要がある。そこで、次に、本作品の翻案のもととなったドストエフスキーの『貧しき人々』の主人公を念頭におきながら、『人生の戦い』の登場人物の特殊な性格について少し触れてみたい。

主人公のラピンは平の官吏ではあるが、決して無教養ではなく、それどころか職業作家を目指すほどに読み書きにたけ、新しい思想の受容に何の障害も感じない都会派の青年である。義

務教育すらろくに普及していなかった当時において、この事実だけでも、すでに主人公はただの庶民ではない。彼の唯一の弱点はただ貧乏であるということだけである。本来なら格闘の対象となる伝統的な因習や観念は、いつ、どのようにしてかわからないが、いつのまにか克服されており、それに悩む姿は出てこない。しかも、若々しいエネルギーにあふれた彼の情熱は、それらの観念によって縛られ、虐げられた人々を解放することに関心が向けられているというよりは、むしろ、それを利用して上流階層の人間の利己主義を糾弾することに向けられている。

彼は、確かに新しい時代の輝ける精神的旗手として描かれているものの、挫折というものを全く感じさせない人物像であって、どこか超人的である。最後には、結局プルーンを失ってしまうものの、その先の将来が悲観的なものとなるであろうことはなぜか考えられない。なぜなら、悲劇をもたらした条件の多くは相手の側にあり、自己の選択の誤りや、深刻な自己懐疑によってもたらされたものではないからである。少なくとも、ラピンの思想が間違っているとの指摘は、登場人物の誰からもなされていないし、作者もそう意図しているとは思えない。しかも、ラピンは往復書簡の中でしばしば、有産階級の積善積徳の行為の裏にある露骨でエゴイスティックな現世利益志向に手厳しい批判を加え、大衆の運や天命や天国にまつわる俗信にも不快感を示しながら、宗教一般あるいは仏教そのものが果たしてきた歴史的役割についての言及は全くしていない。彼は、ただ批評家によって「ヒューマニズム」と名付けられた仏法的慈悲を訴えるのみである。

このラピンの無びょう性の自信は、どこかで確かに作者の自信と繋がっていそうである。他の多くの小説の主人公の場合と同じように、シーブーラパーの描く世界に登場する人物のほとんどがこうした性格をもっている。(急いで付け足すならば、このことは、シーブーラパーの作品に限らず、他の作者の場合もふんだんに見られることである。)そして、こうした人物の性格は、『貧しき人々』の悲劇の主人公マカール・ジェーブスキンのとは際立った差異を見せている。ジェーブスキンの方は、「年甲斐もなく若い娘に振り回された道化師」¹⁹⁾に過ぎず、英雄性といったものを感じさせるどころか、むしろ、滑稽で哀れですらあるからである。そう、この哀れさがラピンには全く感じられないのである。

『人生の戦い』にはまたもう一人の重要人物が登場する。例の、既に名をなした作家ドゥシットである。彼は、ラピンとほとんど同年齢で(27歳=シーブーラパーの当時の年齢でもある)、ラピンと似たり寄ったりの人生の辛酸をなめている。例えば、プルーンと同じような状況で女性に裏切られたりといったことである。しかし、今ではすっかり達観して、金持ちの考えも貧乏人の考えも分り、その両者が決して理解しえないことも分っている(と思っている)。市井人として暮らす必要から、時々、屋敷に客を招いたり、僧侶の話を知ったりしているが、

実際は世俗の人と積極的に交わって、社会的役割を果たす積りも、知識に対する猛烈な欲求もすでに無くなっている。そして、ラピンに対するとき、彼はあたかも解脱した者が、俗人に対して真理を語るように接するのである。かつては苦悩した彼も、今では高踏の高みにあって苦悩することがない。従って、近代知識人としての自我意識に悩み、ついには自己破壊に至るかも知れない道を彼を選ばない。

このドゥシットの姿のなかにも、もう一人のシーブーラパーが発見できそうである。結局のところ、両者は一見対立しているように見えながら、実は二人ともシーブーラパーの中の二つの傾向を現しているだけなのである。ついでに言えば、後期時代のシーブーラパーが、一方で社会主義にシンパシーを抱いて現実的な政治変革に関与していきつつ、他方ではタイの合理仏教の教えに救いを求めようとした根源は既にこの時代にあったと思わざるを得ない。

すでに明らかなように、これら二人の人物の描き方に特徴的なのは、人物はあまりにも理想化されていることである。ラピンの言葉づかいのひとつひとつは華麗すぎてリアリズムにはほど遠く、その内容はまた道徳家のようにしゃくし定規である。一方のドゥシットにしても、その語り口は、もう間違いなく僧侶の説教に近い。そして、本来であれば、これらの点は、読者にある種のこっけいさ=パロディー性を感じさせざるを得ないはずであるが、筆者の真面目さはそれを許さない。「私は真面目にタイ社会の現状を憂えているのだ」という声が、どのページからも聞こえてくるからである。

『人生の戦い』の特殊性は物語の構造の上からも指摘できる。『人生の戦い』が『貧しき人々』を翻案するにあたって借用した書簡形式にあっては、実際の会話はひとつも登場せず、ストーリーは全て叙述の形で展開する。その意味では、書簡形式とは、写実を可能とする状況からは最も遠くに位置する形式である。このことは、逆に言えば、理論による説得が最もやりやすい構造ともいえ、理想的な青年であるラピンの口をかりて異和感なくヒューマンズム思想を披露するのに最適な形をとることが出来ることを意味する。この形式を使えば、作者は、リアリズムによらずとも、彼の論理を実証する事実を強引に作り出すことができるのである。『人生の戦い』は、タイ人の意識構造にほとんど触れておらず、主人公がその中において苦悩する姿が描かれていないが、それもこの形式によれば可能である。

このように見るならば、『人生の戦い』の通俗小説を装った書簡形式の特殊性も理解できるものとなる。そうである限りは、これを恋愛小説と呼ぶことは不可能である。むしろ、これは教養小説の部類に分類されるべきものであろう。つまり、多くのタイの文芸評論家によって不巧の名作と称されている『人生の戦い』は、物語の構造という面から見れば通俗恋愛小説風であるが、作者に擬された主人公の性格とその思想の面から見ると、いわゆる教養小説であるということになる。勿論、様々の文学的経歴を積み重ねたシーブーラパー中期および後期

の小説には、この前者の性格はすでに認められないが、後者の性格は、『また会う日まで』や『未来を見つめて』の登場人物の上に依然として残されているのである。

『人生の戦い』のラピンに仏教的なヒューマニズムを語らせたように、シーブーラーパーが、己が作りだした主人公をして己の思想を語らせるという、文学の方法論としてはいかにも初歩的なレベルをあくまで保持しつづけた理由は、彼が、文学をそれ自体独立した価値を持つ芸術活動とは見なしていなかったことを示しているように思える。彼にとって、それは、より大きな精神活動、すなわち仏教という倫理的価値の追求の下位に位置していたのではないだろうか。

そのことは、たとえば、1954年の「小説についての考察」と題する次の講演にも、ほぼ明らかなように思える。

「一般に小説と呼ばれているものは、歴史的な制約の下にある。つまり、ある時代に存在する実際の人生の範囲内のことを小説は反映することになる。人生を（文学に）反映させるという義務をいかによく実行できるかという点については、（中略）最終的には、人生をどう見るかという作家自身の人生観にかかっている。多くの作家は、その義務を、読者に娯楽を提供することであると考えている。（中略）もっと考えを進めて、小説の役割を「仏法」や「倫理」というものをより良くしていくためだと考えている人々もいる。無論、（小説は）作家の夢をえがいたものに過ぎないから、そんな（高級な）ものではないと言う人もいる。

（中略）

水害があると、ある人々は自然のままの景観を今こそ見に行くのだと行って、着飾って、船で物見遊山に出掛けていく。しかし、農民にとっては、作物も家畜もやられてしまって自然の景観どころではない。これは何を意味しているのだろうか。

我々が見るもの、異なった考えとして生じるもの、その異なった考え、こうしたものはその人物がどう見るか、どのような角度から見るか、どのような世界観で見ることによって違う。各々の作家は、事実に従って人生を描いているのだと理解しているが、そのことこそが熟考してみるべき問題なのだ。自分が、大多数の人が見ている事実であると思って書いたことは、もしかしたら金持ちにとっては事実かもしれないが、貧乏人にとっては違うかも知れない。

（中略）

我々が（自分は）どんなに誠実なんだと自信を持とうとも、そのことは、我々が迷いの道に足を踏み入れるのを防いでくれることにはならない。たとえ我々が、人間の人生の真実を見間違えることがないようにしようと思っても、己れを知らぬがゆえに、易々と間違えて、全く逆の見方をしてしまうことは大いにあり得るのである。（この後、古代インドのある王子

が、父王の言葉に誘われて美しい田園に遊んだものの、そこで目にしたのは、父王の言葉とは裏腹に、生きとし生けるものの弱肉強食の悲惨な世界であったという仏陀の前世物語の一つを引用して終わる)²⁰⁾

このように、シーブーラパーは人間の意識の相対性の中に真理を見出すところまで行きながら、結局は、近代人としての個我の確立という方向へは向かわず、人間と社会の認識の方法を仏教の倫理に委ねてしまっているのである。

6

シーブーラパーは、文学者としてのみならず、思想家、社会運動家としての足跡の大ききゆえに、タイ知識人として、これまで最も語られることの多かった人物の一人であった。しかしながら、ややもすると、彼の文学の芸術的価値の評価は、その進歩的思想の評価の方に比して、幾分なおざりにされているきらいがあった。しかも、数多く論じられてきた彼の思想にしても、人道主義者あるいは社会主義者であったといった直線的な見方が支配的であって、敬けんな仏教徒としての彼の精神世界を含んだかたちでこれを総合的に明らかにしようとする試みはまだなされていないようである。それは、文学者としての彼の業績を正しく評価しないことであると同時に、彼の特定の思想傾向だけを強調することによって、その豊かな精神的営為をも捨象することであろう。

とはいえ、最近に至って、南タイで新仏教運動を続けてきたプッタタート師 (Puttha thāt phikkhu) との若い頃の往復書簡²¹⁾ が発表されるなど、改めて、彼の仏教への傾斜の並々ならぬことが明らかにされてきている。従来の偏ったシーブーラパー評価は、これらの資料の研究を通じて、次第に変わってこざるを得ないであろう。さらに付言するならば、近現代タイ知識人の多くが、仏教的価値に依拠した社会改革 (プッタタート師の「仏教社会主義 (thammik saṅghomniyom)」²²⁾ も加えて) を志向して来ていることを考慮すれば、同じ系譜の上にあるシーブーラパーの思想研究は、これら近現代タイ知識人のよって立つ精神世界を明らかにすることにもつながっていく。

注

- 1) *Lōk Naṅsūe*, Vol. 2, No. 2, Bangkok, 1977, p. 30.
- 2) シーブーラパー著、小野沢正喜・小野沢ニッターヤー共訳『絵の裏』、九州大学出版会、1982年。
シーブーラパー著、安藤浩訳『未来を見つめて』、井村文化事業社、1981年。
- 3) 「民道」(Prachātham) 思想とは、元タマサート大学学長のファイ・ウンパーコンが唱えたタイ的社会発展の四原則である。すなわち、①個人や集団が物質的、知的、倫理的効用のために合理的に仕事をする能力、②身体的、経済的、政治的自由の保障、③生れ、性、地位による差別の排除、④

仏教的価値に由来する慈悲である。シーブーラパーの著作にもこれに類似した考え方が見られる。

スラック・シワラック著、赤木攻訳著『タイ知識人の苦悩』、井村文化事業社、1984年、316～321ページ。

- 4) *Lōk Naṅsūe*, op. cit., pp. 28～89.
Lōk Naṅsūe, Vol. 5, No. 10, Bangkok, 1982, pp. 12～31.
- 5) 1985年より、Dōkyā 印刷所（バンコク）から、初期作品を含めシリーズとしてすでに10冊が刊行されている。（1987年8月末時点）
- 6) *Wārasān Thammasāt*, Vol. 14, No. 2, Thammasat Univ., Bangkok, 1985, pp. 5～38.
- 7) 1920年の後半に結成された「テープ・プリーチャー印刷所グループ」が発展したもので、シーブーラパーを中心にマーライ・チューピニット (Mālai Chūphinit), パット・ネートランシー (Phat Nētransī), ヤーコープ (Yākhōp) ら20名ほどからなる文学者集団だった。この集団に共通する考えは、①西洋文物の積極的摂取、②文学者の経済的自立、③中産階級への精神的支援であった。経済的困難で、1年後に隔週誌の方は廃刊となったが、1939年に日刊誌として復活した。
- 8) *Suphāp Burut*, Vol. 1, Bangkok, 1929.
- 9) 小野沢正喜・小野沢ニッタヤー共訳『絵の裏』、op. cit., 240ページ。
- 10) Sathien Canthimathōn. “*Sāi thāṅ Wannakham phua Chiwit Khon Thai*”, Samnakhphim Caophrayā, Bangkok, 1982, pp. 156～157.
- 11) 当時新聞は、1941年の印刷法で表現の自由を制限されていたため、1952年5月に検閲廃止を訴える「新聞の自由擁護委員会」を作り、シーブーラパーは対政府交渉委員に選ばれた。
Lōk Naṅsūe, Vol. 2, No. 2, op. cit., p. 32.
- 12) Rō Wutthathit, “*Khara Suphāp Burut*”, Chomrom Nakkhien, Ruamsān, Bangkok, 1966, pp. 427～428.
- 13) Cūe Satawēthin, “*Prawat Nawaniyāi Thai*”, Bannakit, Bangkok, 1978, p. 110～114.
- 14) *Lōk Naṅsūe*, Vol. 2, No. 2, op. cit., p. 65.
- 15) Sathien Canthimathōn, op. cit., p. 170.
- 16) Trisin Bunkhacōn, “*Nawaniyāi kap Saṅkhom Thai*”, Sansān, Bangkok, 1980.
- 17) Ruṅwit Suwannaaphichon, “*Sibūraphā-Si Haet Wannakham Thai*”, Pasikō, Bangkok, 1979.
- 18) 江川 卓著『ドストエフスキー』、岩波新書、1984年、15ページ。
- 19) 江川 卓, *ibid.*, 36ページ。
- 20) *Thammasāt*, Mahāwitthayālai Thammasāt, Bangkok, 1957, 巻頭言。
- 21) “*Ruam Coimāi Tōtōp rawat Than Phutthāthātpikkhu kap Sibūraphā*”, Pacarayāsān, Bangkok, 1986.
- 21) Phutthāthātpikkhu, “*Thammik saṅkhomniyom, Münnithi Kōmonkhimuthōṅ*”, Bangkok, 1986.